

神河町史「自然・地理編」 鳥類調査(その2)

町の鳥類について

神河町史調査員(鳥類) 齊木 孝

神河町史「自然・地理編」編さんに向け、全町域を対象とした鳥類生息調査を行いました。

1. 調査の方法

町域を、①平地の集落周辺、②農耕地周辺、③河川・ため池など水辺、④低山、⑤山地(高原含む)の5類型の環境に区分し、その中から代表地点を約40箇所選び、昨年5月から約1年間(延べ42日)現地踏査を行いました。夜行性鳥類は、森林などにICレコーダーを設置し、鳴き声を録音(計162時間)して解析しました。あわせて、地元の方からの情報も参考にしました。

2. 主な結果

現地踏査により119種、録音記録により4種(クイナ、ヨタカ、アオバズク、エゾムシクイ)、これに地元の方からの観察情報等による5種を加え、**合計128種**(うち外来種3種)の鳥類が記録されました。表1に、環境ごとの代表的な鳥類を、渡り区分別(留鳥:年中生息、夏鳥:繁殖期のみ生息、冬鳥:越冬期のみ生息)に示しました。

集落や農耕地の周辺では、スズメ・ヒバリなど留鳥のほか、四季折々にツバメ類やツグミの仲間が見られ、冬にはノスリなど猛禽類が飛来しました。

水辺では、セキレイ類が多く見られ、「水辺の宝石」とも称されるカワセミ(写真)は市街地から上流域まで広く生息し、夏のアシ原ではオオヨシキリ、冬はカモ類が渡来しました。

集落裏山などの低山は落葉広葉樹と針葉樹の混交林に覆われ、エサとなる昆虫類や木の実が豊富なため、留鳥のイカルや夏鳥のオオルリ、キビタキなどが生息し美しいコーラスを響かせ、冬には青い鳥ルリビタキや赤い鳥ベニマシコなどが飛来しました。

山地では、環境省レッドリストで絶滅危惧種のクマタカが複数箇所ですべて通年生息し、峰山高原などには初夏にはカッコウ、冬にはマヒワやアトリなどの小鳥の群れが渡来しました。

兵庫県レッドデータブック2013(鳥類)によると、県の鳥類は379種(うち外来種12種)ですが、内陸の神河町内に飛来する可能性が高い種としては、海や河口の鳥及び台風などで迷行する鳥などを除き、170種程度かと思われます。従って、本調査ではその75%がカバーできたものと考えます。言い換えれば、これ

区 分	留 鳥	夏 鳥	冬 鳥
①集落周辺	スズメ、インビヨドリ、シジュウカラなど	ツバメ、コンアカツバメ、イワツバメなど	ジョウビタキ、ツグミ、シロハラなど
②農耕地周辺	ハシボソガラス、ヒバリ、ホオジロなど		カシラダカ、ビンズイ、ノスリなど
③水 辺	セグロセキレイ、カワセミ、アオサギなど	オオヨシキリ、ヒクイナなど	マガモ、カワアイサ、クササギなど
④低 山	イカル、カケス、アオゲラなど	キビタキ、オオルリ、サンショウクイなど	アオジ、ルリビタキ、ベニマシコなど
⑤山 地	アカゲラ、ゴジュウカラ、クマタカなど	カッコウ、ヨタカ、アカショウビンなど	マヒワ、アトリ、ヒレンジャクなど

▲ 表1 環境別・渡り区分別の代表的な鳥類(春・秋のみ通過する旅鳥は省略)

から先も40種程度は町内初記録となる楽しみが残されています。

野鳥の楽園とも言える神河町の鳥たちに一層の関心をお寄せいただき、町の今の姿を記録に留め、後世に伝えてまいりませんか。